

# 武者小路実篤 「彼が三十の時」の世界

——〈死の超越〉につながるもの——

寺澤浩樹

## 一 はじめに

武者小路実篤の小説「彼が三十の時」は、『白樺』一九一四（大正三）年一〇月号に第一章から第二章が、翌一二月号に第一三章から第二八章が発表された。『白樺』時代の武者小路の小説の中では、自伝的小説「或る男」（大12・11完結）、小説「第三の隠者の運命」（大11・10完結）などに次ぐ長篇である。翌年二月、創作集『彼が三十の時』として、戯曲「Aと運命」、小説「第二の母」、戯曲「罪なき罪」などとともに洛陽堂から刊行された。

この作品（以後、本稿では、小説「彼が三十の時」を「作品」と呼ぶ）をひとことでは、実際に数え年で三〇歳であった、当時の武者小路の作家生活を私小説風に描いたものであるが、そこには様々な問題が含まれている。研究史上においても、この作品を単独で取り上げて論じたものはほとんどない。評価が難しいこの作品を検

討するにあたり、最初に、作者自身による解説を、その自伝的小説「或る男」の第七十三章（以後、〈百七十三〉と記す）から見てみたい。

その秋、彼は「彼が三十の時」をかいた。之は彼がそれ迄にかいた内最も長いものであるが、小説としてはまとまったものではない。当時の彼の生活をかいたものとして見れば、いく分か価値があるであらう。勿論これは事実そのまゝに全部かゝれたのではない。

岸田がかいてみた水浴の画は少年が三人ゐる画だったのを、彼は女の画にした。さう云ふ風のちがへ方や、一人の人を二人にしたり日をちがへたりした。しかし同時に事実も沢山まじりこんでゐる。初め彼はもつと小説らしいものを書かうとした。全然つくりものにしようとした。しかし書いてゐる内に段々事実にへばりついてしまった。飛行機が始め滑走し

てゐて、ある所から地上をはなれるやうに、彼は始め少し事実をかいて、それから勢が生れて来るに従つて想像の世界に入りたいたいと思つたのだ、しかしそれがどうも不たしかな感じがした、つくりものになりさうな気がしたのと、事実のなかに入ることに段々興味を感じたのとで、とう／＼半分日記のやうな小説になつた。彼等の生活の記録としてより他はあまり価値のないものになつてしまつた。

彼はこゝで自分と同じく生長慾、征服慾に燃えてゐた長与、岸田、千家と自分を主人公にした。志賀は京都にあたり、柳は我孫子に居たり、小泉は許嫁の人を失つたり、次の恋の問題なぞで、彼達の仲間から少しはなれてゐた。

それにあまり多くの人をかくのも厄介なので、彼が一番、当時意気投合してゐた三人との交りを主にしかいた。あとは彼自身の仕事、及び家庭の生活をかいた。

〔百七十三〕\*

この引用の前半部からは、この作品が「つくりもの」であることへの逡巡の末、「事実」性に帰着したという構想の変化の経緯がわかる。また後半部からは、この作品が「生長慾、征服慾」というモチーフを持つこと、また、この作品には、主人公「彼」と他の「三人との交り」、お

よび「彼自身の仕事、及び家庭の生活」という三つの筋展開が織り込まれていることがわかる。

これらを解説する武者小路の口ぶりには、「小説としてはまとまつたものではない。当時の彼の生活をかいたものとして見れば、いく分か価値がある。」とか、「とう／＼半分日記のやうな小説になつた。彼等の生活の記録としてより他はあまり価値のないものになつてしまつた。」などと、謙遜めいた響きが感じられる。しかし、轟音を立てて滑走路を旋回するばかりで、つい離陸しなかつた飛行機ならではの、独自の迫力と面白さはあるものと思われる。そして武者小路は、この作品を、「小説」というよりは「半分日記」、あるいは「生活の記録」と言うが、もとよりそれは武者小路の得意な文芸のスタイルだつたはずだ。ましてこの頃の武者小路は、作家としての著名度を激しく加速しているさなかでもあつた。

そこで次に、以上のような特徴を持ったこの作品の構成を図表にして概観し、その筋展開とモチーフについて考えたい。

## 二 作品の構成

まず、次々頁の「図表 作品の構成」の各項目と、そ

の設定理由などを、簡単に説明する。

右端最上段の「章」は、作品に付された章を表し、(一)～(十二)までを「前半部」、そして(十三)～(二十八)までを「後半部」とした。さらに、筋展開上の主要な節目となる章を○印で囲って示した。

また、この各章の分量を知る目安として、「量」という項目を設け、これを偏差値で表した。たとえば、(十三)と(十七)は「37」で最も短い、逆に(二十六)は「79」で最も長い章である。

次に、この作品における時間を検討するために、「日」という項目を設けた。ここでは、前半部では(一)、後半部では(十三)からの日数を表した。また、その空間を検討するために、「外出先」という項目を設けた。これは、主人公の「彼」が外出して訪れた先のことであるが、外出の前後、および空欄部分は、すべて自宅にいたこととなる。

「登場人物」は、各章の登場人物の事だが、全体を通して現れる「彼」と「妻」、および時々描かれる「母」は省いてある。また、手紙による通信の相手を「」内に記した。

次に、この作品の中心的な筋展開を担う「彼」の仕事ぶりを概観するために、「執筆度」という項目を設けた。

ここでは、その進捗状況を、おおむね、×、△、○、◎の順に記した。

最後の「主な内容」には、「彼」の主な行動や心情を、簡潔に記した。

そして、図表の末尾には、以上の説明の要点のみを、※印を付して記した。

なお、この構成の「前半部」と「後半部」は、それぞれ『白樺』に発表された時の一回の掲載分に当たるが、この作品では、それが同時に、作品中の時間経過および内容の区切りにもなっているので、そのような二部構成となるものと考えた。

次に、この作品の筋展開とモチーフを概観したい。

作者武者小路も述べていたように、この作品には、「彼自身の仕事」、「彼」と他の「三人との交り」、「家庭の生活」という三つの筋展開が織り込まれ、それぞれが密接に関連しながら作品全篇を進行させている。これらをそれぞれ、〈執筆経過の筋展開〉、〈交友過程の筋展開〉、〈夫婦生活の筋展開〉と呼ぶこととする。

第一の〈執筆経過の筋展開〉は、主人公の「彼」が、強い「生長慾、征服慾」によって、作中の「小説」を完成させる物語である。したがって、この筋展開では、〈成長〉のモチーフが表されると考えられる。



⑳	27	26	25	24	23	22	21	20	19	⑰
41	65	79	47	61	48	38	50	59	43	44
15	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
		K・神田	T	O		丸善	展覧会	T・O	展覧会	
[F]・[読者]	客	K・[読者]・障害者・若人	[友]・T・Tの友・客	K・O夫妻	[読者]・友	[T]	K	T・O夫妻	Y・K・外国人・若人・[O]	[O]・[読者]・T・K・[Y]
○	△	○	◎	○	○	◎	○	○	○	×↓○
										○と和解。Kの活気や読者、T、Yの言葉に励まされる。Kの展覧会。外国人の話。若い人に反論。執筆の努力。Tと散歩。○宅で芸術家を論じる。妻と喧嘩や仲直り。Kの展覧会や自作の世評。H・Mについて。妻と寝る。Kの世評への反発。久しぶりに執筆成功を確信。妻喜ぶ。読者からの激励。絵画に力を得る。自身の弱気を戒める。Kとチントレットの話。○夫妻と歓談。妻と喧嘩、和解。妻とT宅訪問。客の応対を反省。執筆好調。妻先に寝る。戦争の夢。Kと創作論。障害者の物売り。若い人と歓談。無遠慮な客と戦争、社会、性、自己、運命について対話。読者からの手紙に感激、妻と喜ぶ。返信。祈り。日記。

※「量」は偏差値で示した。「日」は、前半部では〈一〉、後半部では〈十三〉からの日数を表した。「登場人物」からは、「彼」と「妻」と「母」を省いた。

第二の〈交友過程の筋展開〉は、志を同じくする友人たちと「彼」の交流の物語である。ここでも〈成長〉のモチーフは強いが、主となるのは〈友情〉のモチーフであると考えられる。

第三の〈夫婦生活の筋展開〉は、作家である「彼」と「妻」の生々しい生活の物語である。ここでは、二人の関係が多様な面から描かれているが、主となるものは〈家

庭〉、および〈性〉のモチーフと言えるだろう。

これら三つの筋展開の中でも、主人公の「彼」が作中の「小説」を完成させる物語である、第一の〈執筆経過の筋展開〉が、他の二つの筋展開を主導し、〈成長〉のモチーフを強く表現しながら、作品の主題に至るものと考えられる。

### 三 三つの筋展開とモチーフ

次に、それぞれの筋展開とモチーフの内実を見る。

〈成長〉をモチーフとする、第一の〈執筆経過の筋展開〉においては、作品冒頭以後、「彼」の仕事ぶりが、やや狂騒的な人物造型の中で描かれる。しかし、〈十〉での自作への絶望と妻の励ましを境として、落ち着いた執筆ぶりに変わり、〈十二〉のTの雑誌の発行禁止や出征兵の目撃を余韻として、作品の一旦終了、つまり前半部の末尾に至る。後半部では、友人「O」のモデル問題に悩まされることで、執筆がまったく進まなくなるが、〈十八〉での「O」との和解によって再開され、〈二十八〉の結末部に進んでいくことになる。

したがって、この執筆の筋展開では、前半部では〈十〉および〈十二〉、後半部では〈十八〉および〈二十八〉などが節目となると考えられる。作品の主題につながっていく、この第一の筋展開については、後にまた検討する。

〈友情〉をモチーフとする、第二の〈交友過程の筋展開〉においては、最も登場回数が多い「K」と「彼」との関係が、文芸と絵画というジャンルの異なる、しかし〈成長〉の志を同じくする者同士の〈友情〉で結ばれて

いる姿として描かれる。特にその絆が強まるのは、〈二十一〉の「K」の世評への反発である。これに対して、「T」と「彼」との関係、および「O」と「彼」との関係は、同じあるいは近い雑誌を発行する文芸の仲間であり、同じく〈成長〉を志す者同士の〈友情〉で結ばれてはいるが、特に「O」に対しては、競争関係が見られる。これが後半部の〈十四〉から〈十七〉まで続く「O」の小説」のモデル事件の伏線となっている。

このように、この交友関係の筋展開では、前半部はほぼ全体を覆い、後半部では〈十八〉や〈二十一〉が節目となるものと考えられる。

次にこの第二の筋展開における問題点を検討する。

Kはレンブラントや、ルーベンスや、チントレッツトの絵を見て今更におどろいた。さうして自己が心細くなるやうに見えた。彼はドストエフスキーやストリントベルヒを思つて自分の小さいことを情けなく思った。  
〈十八〉\*

「K」は画家へ、「彼」は文芸家へと、それぞれの芸術上の偉人をつねに念頭に置き、それらへの賞賛の思いを繰り返し語り合うことで、美術と文芸は芸術として融合し、彼らの信仰と生き方の結束を強め、固めていく。

特に後半部〈二十一〉では、美術の個性が不評であつ

た「K」とともに、「彼」は文芸の批評家への不満をぶつけ、互いに慰め合っている。これは(二十四)でも繰り返される。苦境の中でこそ励まし合い、前向きに生きようとする力を得るといふ形で、この(友情)のモチーフが(歓喜)や(悲壮)の情調とともに強く表現される。(二十二)でも、「彼」は「T」からの來信によって、さらに力を得ている。

ただし、「K」や「T」との間の調和性とは異なつて、「O」との関係には、危機と和解という動的な筋展開の中で、(友情)とは相容れない異物が含まれている。「O」の小説」のモデル問題がこじれた理由について、「彼」は次のように考へる。

自分は矢張りOが自分を邪推したやうに、自分もOを邪推したのだと思つた。邪推の目を持つて見た処にはいたる処に邪推されるべき幻を見た。しかし邪推を打ち消して見るとその幻はつかみ所のないものゝやうに見えた。(十五)

また、次の(十六)で「彼」は、これに加えて、「彼は嘗つてはOの先輩だつた」という「二人の位置のせい」だ、と考察している。

このように、この作品では、「友情」のモチーフは、単に存在する、というのではなく、知恵や洞察によつ

て保たれていく、ということが表現される。

(家庭)および(性)をモチーフとする、第三の(夫婦生活の筋展開)においては、仕事場が自宅である作家の「彼」と「妻」の、日々の厳しい(家庭)生活の様子が、生々しく描かれている。

(家庭)の持つ意味は多様だが、「妻」と二人暮らしの「彼」にとつては、夫婦関係が基本となる。(八)、(十五)、(二十)、(二十四)などでは、二人の喧嘩と和解の様子が描かれているが、執筆に絶望した「彼」が「妻」に励まされた(十)、「彼」との平和な一日を「妻」が喜んだ(二十二)などでは、「妻」と共にある幸福が描かれている。

このように、(夫婦生活の筋展開)は、作品の全体を覆うものではあるが、大きく見れば、この前半部の(十)が節目となるものと考えられる。

次にこの第三の筋展開における問題点を検討する。

「彼」と「妻」の喧嘩は何度か描かれるが、中心となるのは、語りが焦点化される「彼」の心理や行動である。彼は静かな時には、兎のやうな顔をしてゐる、しかし少しの刺戟は彼を猛獣にする、猛獣になつたかと思ふ、すぐあとで兎のやうになる。この呼吸だけは彼の妻さへのみ込めなかつた。(十五)

たとえばこの喧嘩の場面では、そのきつかけが「彼」の作家ならではの特異な性情ゆえのこととして説明されている。しかし、非があるのは「彼」の側である。ほかにも「妻」に対する様々な横暴が描かれるが、このような「妻」の協力の上で、調和的な関係を保とうとする「彼」の努力は、かろうじて報われている。

喧嘩にせよ、和解にせよ、こうした夫婦関係の根底には〈性〉の問題がある。〈家庭〉という、社会の最小単位の要となるものは〈性〉にほかならない。この作品では、「彼」の思いや「妻」の行動、言動などによって、夫婦間の〈性〉や愛をめぐる、夫婦の関係が生々しく描かれている。おおむね、起床から就寝までが一章となる日記的構成を持つこの作品の各章末尾には、妻とどのようになら寝たか、ということが具体的に書き込まれていることは特徴的である。

〈五〉では、執筆に没頭するために、妻との性的関係を拒否した「彼」が、「二夫多妻の本能」が「自分の内にかくれてゐる」かもしれない、などと考えている時に、偶然的きつかけで、「彼」の初恋の女性である「小樽の人」のことで妻が泣き出す場面がある。そして「彼」は次のように考える。

男女の間には秘密にしなければならないことがま

だ沢山ある、妻も恐らく、自分が云つてもらつては困ることを沢山持つてゐるだらう、自分も。彼はさう思つた。しかし彼はそれはあたりまへのこととして互に秘密にしなければならない、しかし秘密にすることによつて、やゝもするとその本能が安心して生長することを感じた。だが愛はそれを微妙に調和してくれるだらう。彼はさう思つた。

彼はとけない謎の多いことを感じた。彼は又それを安価にとききたいと思はなかつた。

彼は妻を可憐に思つた。

〈五〉

「彼」は「愛はそれを微妙に調和してくれるだらう」、「とけない謎」を「安価にとききたいと思はなかつた」と考えている。それが〈性〉に由来し、夫婦という〈家庭〉を挟んで社会に至る問題に対する、「彼」の態度である。

後の〈八〉では、この部分の原稿を「妻」が読んで淋しく思うことになり、同時に「彼」は「妻」がそう感じる原因が、「この五六日、何時でも独りで寝かされ、さうして起きて見ると独りで寝てゐる処」にもあると考える。そして、後に「貴夫は妾を愛してゐらつしやらないのです。妾はゆく処があつたら出て行かうかと思ひましたわ」などと「妻」に言われるほどの大喧嘩につながつ

ていく。

こうした日頃の勝手ぶりにも関わらず、執筆に行き詰まった「彼」を優しく励ます「妻」に対して、「彼」は次のように思う。

自分の今度の仕事が少しでも役に立つ仕事ならば、妻にすべての手柄を与へたいと彼は思った。(十)\*

「彼」のこの言葉や、「妻」の「今日は一度も怒られませんでしたわ。本当に今日はいゝ日でした」(二十二)という言葉からは、夫婦の日々の暮らしの緊張感の上になり立つ、調和の歓喜の情調が感じられる。

なお、この作品には、彼夫妻のみならず、「K」や「O」の夫妻のことも書き込まれている。とりわけ貧しい「K」の妻の苦勞が描かれている。このように、作家や画家といった芸術家の生活を、夫婦関係をも含めて描いている点に、この作品の特質があると言える。

以上のように、この作品の第一の〈執筆経過の筋展開〉、第二の〈交友過程の筋展開〉、第三の〈夫婦生活の筋展開〉という三つの筋展開は、それぞれの節目ごとに密接に関連し合いながら、作品全篇を進行させ、その山場を形成する。それは、(十)の「妻」への感謝、および(十二)の「T」の雑誌の発行禁止と出征兵の目撃、および(十八)の「O」との和解、そして主題が示される

最終章(二十八)であると考えられる。

#### 四 「戦争」と「芸術」の関係

第一の〈執筆経過の筋展開〉には、「小説」完成への道という、〈成長〉のモチーフがあると述べたが、その内実は、自己と社会——そこには背景としての戦争が含まれる——との、芸術を媒体とする関係の構築、という目的があるものと考えられる。

こうした意味で、この作品では、社会的背景として「戦争」の問題がしばしば言及される。しかし、「彼」の態度はこれに対して距離を置いている。最初に前半部(六)の記述を見る。

Oの処へ行く途中、電車の中から彼は兵隊の炎天に照らされながら体操をしてゐるのを見た。如何にもそれが間抜け見えた。彼はそれを見た時、あんな事を二年して戦争へ行つて、さうして死ななければならぬ人間のことを考へた。彼は大きな問題にぶつかつたやうな気がした。しかしそれは解くことのない出来ぬ苦しい問題だつた。彼は仕方がないこととして見ぬふりをするより仕方がないと思つた。さうして自分の境遇を勿体ないと思つた。自分の境遇に

ゐて何もしなかつたらそれはこの上ない恥辱だ、彼はさう思つた。さうして今の仕事をやり上げるより仕方がないと思つた。

〈六〉

ここでは「戦争」と「死」という「大きな問題」に対して、「仕方がない」という言葉が繰り返されていく。そして「彼」は、「今の仕事をやり上げる」道を選択している。

前半部最終章となる（十二）には、「T」宅で出征兵たちの叫び声に異様な感動を覚えたり、その帰宅後に友人と戦後の日本について語り合う場面がある。しかし、この章の末尾にも、「彼」は次のように思う。

しかし彼は今の自分はなるやうにさせるより仕方がない、今の自分の仕事をするより仕方がない。彼は自分にひらつと姿を見せた人類、殊に国民の未来の恐ろしい暗黒を正視することをやめた。さうして机に向ひ、少し仕事をつづけてから床に入った。

〈十二〉

「彼」が「恐ろしい暗黒」から目をそらしてしまつたことで、「戦争」はこの作品のモチーフと言えるほどの意味を持ち得ていない。そして、不安の余韻を漂わせながら、作品前半部の幕が閉じられる。

後半部では、「彼」が「Oの小説」の問題に悩み続ける

中、新聞で戦争の記事を読み、兵士の間や市民への暴虐を思いながら、次のように考える。

彼はそれを思ひ出すことによつて戦争を悲惨だと思ふよりも、そんな目にあつた人間の心の内がいたましく感じられた。

〈十六〉

この言葉の意味は、「彼」にとつて「戦争」とは、「そんな目にあつた人間の心の内」の問題だ、ということである。それは、「戦争」とは観念ではなく具象の問題だ、あるいは、人間一般ではなく、ある個人の問題だ、という意味ではないだろうか。

そして、戦争や社会問題は、次のように、「彼」にとつてはさらに切実であつた、「Oの小説」のモデル問題と比べられる。

彼はかう云ふ問題に正面を向けることの出来る人間ではない。彼は聖者の心を察するが、彼は見て見ぬふりをするより仕方がない。たゞ憐れな個人の生命に遠くから淡く愛を感じる許りだ。さうして彼はつまらぬ自分のエゴイストから親しき友と喧嘩する時に起すやうな精神活動の百分の一も之等の問題に起すことが出来ない虫のよさに当然さを感じずるより仕方がなかつた。

〈同〉

このように、「彼」にとつての戦争や社会問題の観念性

が暴かれ、同時に、そのように感じる自己が肯定されているのである。

また、(十八)では、読者からの手紙を読んで次のように考える。

その日午後、京都の人から彼のものをよんで感激した。性の問題、国民の未来、戦争の問題などについて考へさせられたと書いて来た。彼は之を読んだ時、喜んだと共に自分が之等の問題に就て何事も知らないのおどろいた。(中略)

だが力なき彼はたゞぼんやりと淋しい心を持ち、愛を感じながらそれを見るより仕方がないのだ。彼は僭越な望を持ったものゝ末路を知つてゐる。それは虚偽と空虚を通しておち入る滅亡だ。(十八)

「性の問題、国民の未来、戦争の問題」などの社会「問題」に対して、「自分が之等の問題に就て何事も知らない」と「彼」は自ら驚くが、それに対する「僭越な望を持ったものゝ末路」が「虚偽と空虚を通しておち入る滅亡」だ、という言葉は強烈な表現である。社会問題の解決への性急な姿勢は、このように厳しく拒絶されている。こうして、周囲の諸問題に対する自分の態度に悩みつても、「彼」は次のように考える。

彼は丁の処にある絵を見ながら、ロダンがほめて

ゐるウードンの子供の胸像の写真を見てみたら、心から嬉しくなつた。芸術はどうしてかう人々の愛を受け入れる資格をもつてゐるのだらうと思つた。彼は別に問題に触れてゐない、本当の芸術的なものもいゝものだと思つた。彼は真の芸術を味うことのない人を知つてゐる。しかしこの人の心にふれる、生々した感じは否定することの出来ない、大きい事実だと思つた。芸術のない世の中は、彼には心細い、荒れたものと思へなかつた。(二十)

ここにある「問題」とは、先の「性の問題、国民の未来、戦争の問題」にほかならない。これに對置して「本当の芸術的なもの」、「真の芸術」の重要性を肯定している。つまり、様々にある社会問題ではなく、その根底の「芸術」を強く志すことが、「彼」の「問題」への態度だと考えることができる。

(二十六)で「彼」は、夢から戦争の問題を思い、また自身の女性問題のことも考えるが、結局は「仕事」、つまり作家としての自己にのみ希望を見出す。

世の中の出来事、殊に悲惨事を彼は傍観するより仕方がなかつた。しかし彼はそれによつて刺戟され、生むべきことを生むより仕方がないことを知つてゐる。

彼はたゞ一生自分の仕事にすがりつくより仕方がないことを愈々知つた。それが多くの人には無意味以下に見えやうとも、ある人には力を与へるだらうと思つた。

(二十六)

この(二十六)には、障害を持った若い物売りを断つて歸す場面もある。その最後に「彼は又机に向つた。彼は別に気の毒とも思はなかつた。きまりがわるいとは思はなかつた。」と書かれている。「彼」が世間的な自己主義者であることをあえて見せているようだ。しかし、その真意は、「より自分になる」という言葉となつて、作品末尾で述べられることになる。

## 五 「エネルギー」と「リズム」のドラマ

第一の(執筆経過の筋展開)では、もちろん「彼」の執筆のあり方が問題となる。すでに触れたように、作品冒頭以後、「彼」の仕事ぶりが、やや狂騒的な人物造型の中で描かれるが、(十)での自作への絶望と妻の励ましを境として、落ち着いた執筆ぶりになつていく。ここでは、その変化を少し詳しく見て、その内実を検討したい。冒頭部で「小説」の執筆を始めた「彼」は、次のような気持ちだつた。

その夜遅く彼は小説をかき出した。彼れはその小説の内には対話も、感想も、詩も、かきこまうと思つた。自分の力を底からさらけ出したと思つた。彼はつぎからつぎと書きたいものが頭をもち上げてくることを覚えた。まだ創作的エネルギーがある。わきにそれてくれない限り書いて書いて、書きまくることが出来さうな氣になつた。彼は書きつづけた。

(一一)

こうして意欲的な執筆が続き、「嵐のやうに征伏の慾望が頭をもたげ」(同)てゆく。執筆の好調は(三)、(四)と続き、「リズムよ、なり響け。我が内にわき出づる泉よ、心残りのない程に流れ出でよ、いやが上に流れ出でよ、さうして最も大なる川を形ちづくつて海に流れ入れ！」(四)と、「彼」の思いは詩の言葉のやうに語られる。興奮は「彼」を眠らせることはなく、翌朝には極限を迎える。

彼は益々かいた、自ら押えることの出来ない程頭が緊張して来た、彼は七時半頃までかきつづけた。彼は自分の仕事の完成することの出来ることを感じた。しかも自分の内にあるリズムの流れゆくさきの遠いことを感じた。彼は今度こそは物になるものが書けると思つた。彼は心の内には自己の勝利が感ぜ

られた。

妻が起きて顔をあらう時分は絶頂に達してゐた、彼はもう筆をとることも出来ずに室の内を歩きまわつた。(中略)

彼は又歩きまわつた。頭は疲れて来たが、緊張のよどもりはこのつた。この頭をどうしたら静まるだらう。彼は朝飯を食つて暫らくして、午睡した。(四)

このように、「彼」の執筆には激しい「エネルギー」を要する「リズム」の発生が必要だが、度が過ぎれば、興奮によつて「筆をとることも出来」なくなる。(六)で「O」宅を訪れた「彼」は、「自分の元気がよすぎるのを感じた。一人で怒鳴りたい様な氣になつてゐた」、そして「自分のかいてゐる小説の題を「征服狂」とつけやうかと思つた」ほどだ。このように、やや狂騒的に書き続けた「小説」は、しかし(十)でスランプを迎える。

彼は頭の恐ろしく零になりつゝあることを感じた。彼はもう一步も切り開いて進めない氣がした。事実をかくのであつたが、その事実が彼のリズムにとけて言葉となつて流れ出ないことを感じた。(十)

失われた「リズム」を求めて、「彼」はここで初めて、原稿を読み返し、絶望に陥る。この苦境から救つてくれたのは「妻」であるが、以後、「彼」の執筆には落ち着き

が出てくるようになる。

彼は静かな氣持でかきつゞけた。彼は書き上げられない不安もなく、書き上げた時の勝利の自覚もなく、たゞ書くべきことを忠実にしつかりと書いて行つた。彼はもう殆んど野心を感じなかつた。彼は破らなかつたことを別に幸福とも思はなかつた。しかし自分の仕事に就いては冴えた自覚を得て来た。(中略)

どうせ今の自分のかくものは不滅の作ではない、真理にはまだ距離の遠い作だ。たゞある人々の内に、愛を起させ、ある慰安を与へ得ればそれで足ると思つた。否それすらも彼は意識せずたゞ静かに流れるまゝに水が流れるやうに筆を走らしてゐた。

過度と云ふものがなかつたので、彼はあまりつかれなかつた。(十一)

ここには「勝利の自覚もなく」「野心を感じなかつた」とある。逆に、それまでは「嵐のやうに征伐の欲望が頭をもたげ」(一)、マウ「心の内には自己の勝利が感ぜられた」(四)が、結局、失敗に終わった。つまり、「彼」の正しい(成長)には、「エネルギー」と「リズム」のバランスが必要だ、ということがこの作品には描かれている。

第二の(交友過程の筋展開)において見られたように、「彼」は友人たちとともに、芸術上の偉人たちをつねに念

頭に置き、それらへの賞賛の思いを繰り返し語り合うことで、あるいは、批評家への不満を互いにつけ、慰め合うことで、芸術への信仰と生き方の結束を強め、固めていった。そして日本の文壇の「征服」や「勝利」への欲望を育てることで、創作の「エネルギー」を生み出し、「彼」の「リズム」とけて言葉となつて流れ出（十）することができ。〈十九〉では「喰ひ入れ、喰ひ入れ、喰ひ入るより外にリズムはわき出ない。リズムに掘りあてることが出来ないと思つた。（中略）ジョーンのやうなエネルギーがほしい。どんな大きい仕事でもやり切るやうな力がほしい。彼はさう思つた。」とあり、〈二十三〉では、「充実し切つた瞬間の重なりが、自分を生長させ、自分に人類的リズムに喰ひ入る力を与える」と「彼」は考へる。このように、この作品は、執筆生活という日常の場を舞台にした、人類、偉人、友、読者、妻、そして自己の間に響き合う、「エネルギー」と「リズム」のドラマでもあつた。

## 六 〈死の超越〉につながるもの

さて、後半部の〈二十三〉には、「彼の知らない」読者からの、激励の手紙全文が書かれている。「誰かのいたず

らだ、文章まで自分に似せてある」と「彼」は思うが、この不明の差出人は、後の〈二十七〉では「無遠慮な人」として「彼」を訪問しつつも、結局は深く打ち解け合うことになる。ここでは長い対話が描かれている。この虚構的な人物の設定は、この作品における、書簡形式、対話形式という、表現の場を可能にしたものと思われる。「彼れはその小説の内には対話も、感想も、詩も、かきこまうと思つた。」（一）と書かれていた通りである。

この人物との対話で、「彼」は、生命の危険にさらされた上でも、執筆は続ける、発売禁止になつたら自費出版をする、対立する作家にでも頭を下げる、徴兵されれば戦地に赴く、また、機会があれば姦通もする、などと告白させられていく。また、「彼」のひがみややすい性格、家庭や学校、そして社会での困難などによって「侮辱を感じると生長を強ひられる習慣が出来てしまつた。」と云う。その上で、「人類の運命」の「狂ひ」としての「戦争」を、自己の「運命」の問題と仮想して重ねる。

このような問答によつて、「彼」の社会や女性の問題に対する考えや態度が整理、ないし総括されることで、第一の〈執筆経過の筋展開〉は、最終章〈二十八〉につながつてゆく。その意味では、この虚構的な人物は、この筋展開を大団円に導く機能としても設けられと考えられ

る。

〈二十八〉で「彼」は、「毎月あなたのものを楽しみにしてゐます。自分のために書かれてゐるやうに嬉しく思ひます。」と書かれた読者からの手紙に感激し、それを「妻」に見せて共に喜ぶ。これは、作品冒頭部で、読者からの厚意に満ちた手紙が三通も届いた時の「文芸の仕事をするものより他はこの楽しみは知らないだらう」(一)という「彼」の思いに対応するものと思われ、作品の構想の一部と言えるだろう。

その返事に、「彼」は「私達はより自分になることに他人とより友達になり、より自分になることを「信じ」「感じ」「知る」ことが出来ることを喜びます。」と書き、続けて日記に次のように記す。

「自分はより自分になる。自分の仕事は自分をより、自分にする。さうしてそれが或人をより或人にする。さうして二つの間に愛が生れる。その時二人の心は感謝と愛によつて満される。それは肉体の苦痛には負けても死には勝つ。」

〈二十八〉

読者への返信から、「日記」の記述に進み、「彼」の思ひは深まっていく。そしてここには、人がそれぞれの個性の極みに達した時、自他を超える愛が生まれ、死を超越する、と記される。

先の返信には、それには「信じ」「感じ」「知る」という、人間の根源的な知情意全体の働きが必要であることが訴えられていたが、前節で見たように、人類、偉人、友、読者、自己の間に響き合う、「エネルギー」と「リズム」が生かされた「芸術」こそが、それを可能とするのではないだろうか。さらに、「肉体の苦痛には負けても」という言葉は、「戦争」に象徴される社会問題を指しているのではないだろうか。

こうして、〈成長〉のモチーフは、「芸術」を間に置いて、さらに〈死の超越〉というモチーフ、というよりは主題に展開するものと考えられる。そしてここからは、作品冒頭の「死んだ嫂」から読者の「死」を知らされる、という夢もまた、先の読者からの手紙と同じように、さらに重要な伏線として構想されたものであったと考えられる。

この後、「彼」は「異様に興奮」し、「自分の一生の流れつく処」を感じ、「何ものにか祈」る。初出時、つまり『白樺』発表時には、この作品は、ここで終わっていたが、翌年の単行本収録時には、次の言葉が追加された。<sup>\*5</sup>

この時ある考が彼をおそつた。彼は再び机に向つた。さうして

「しかし個人と個人の愛以上のものがある。それは

耶蘇にとつての十字架だつた。すべての人に嫌はれても云はなければならぬことがある。それは何処から来る。さうしてそれは何の為か？ 人類の意志からか？ 自然の意志からか？ 真理からか？ 自分は知らない。しかし自分はあるものに従順な男でありたい。それは死に克つもの、さうしてソクラテスに甘じて毒杯をのませ、耶蘇をして甘じて十字架に自己をかけさしたものだ。それは恐ろしい。だが自分は其処まで自分を逐ひやつてくれるものをまつてゐる」彼はさう日記にかいた。彼は何もの前にかひれ伏したい気がした。しかし次ぎの瞬間に彼は又何時もの彼になつた。

彼は何処に流れつく人間だ？

それはたゞ時が知つてゐる。

(二十八)

この追記部分で補足された、「死に克つ」、「個人と個人の愛以上のもの」、すなわち〈死の超越〉につながるものとは何か。それは、「人類的意志」、「自然の意志」、「真理」、そして「あるもの」から来る、とも書かれている。ここでは「神」という言葉が使われていないから、そう説明するのは厳密には正しくないが、強いて言えば、やはり神の愛のごときものと考えられる。「ソクラテス」の「毒

杯」や「耶蘇」の「十字架」を引きながら、自己の使命を思う「彼」の姿には〈悲壯〉の情調が漂う。この作品は、こうして、轟音を立てながら、日常という滑走路を、ついに離陸しなかつた飛行機が、空の彼方にあるかもしれない、神の愛を求めた物語なのである。

## 七 おわりに

本稿冒頭で述べた通り、この作品の大きな特徴は、武者小路の作家生活を私小説風に描いた、という点にある。しかも、「彼」が執筆を続けている作中の「小説」とは、まさに、この小説「彼が三十の時」そのものであると考えられる。したがつて、「彼」の執筆経過は、この作品の内容的、形式的な完結と重なることとなる。その意味で、この作品は超虚構的であると言える。

また、この作品は『白樺』の一〇月号と一一月号の二回連載となつたことで、現実の時間や事柄に関わるという、記録文学性を持つものとなつた。特に、この作品後半部の、「〇の小説」に対する主人公の懊悩をめぐる記述は、まさにこの作品の前半部が発表された『白樺』同月号に同時掲載された、「〇」のモデルである長与善郎の戯曲「月蝕」に対する弁明でもあつた。その意味では、こ

の作品は、同時進行性<sup>リアルタイム</sup>をも持つものである。

このような私小説的、超虚構的、記録文学的、同時進行的特徴は、この作品に強い現実性<sup>リアルティ</sup>という特質をもたらしものと考えられる。ただしそれは、仮名の人物やメディアが、実名のそれと一致するかしないかといった、モデルや事実<sup>モデル</sup>に密着した作品である、という問題にはとどまらない。前節で見たように、この作品の主題は、〈死の超越〉であったが、それを可能とするのは、人類、偉人、友、読者、妻、そして自己の間の「リズム」の響き合いであった。

ここで思い出されるのは、この作品の前年の一九一三（大正二）年に刊行された『生長』を中心とする、武者小路の〈初期雑感〉である。これについて、筆者は「創作それ自体を描いた〈初期雑感〉は、生身の武者小路実篤という人間全体ではなく、創作して自己を生かそうとする自己というフィクション<sup>フィクション</sup>を読者に提示するもの」であり、「その提示によって（武者小路の言葉を使えば）、読者の内なる武者小路としての自己を生かし、読者を武者小路とともに〈自然〉という〈神〉<sup>神</sup>に向かわしめる文芸<sup>文芸</sup>」である<sup>7</sup>と述べたことがある。

このような〈初期雑感〉の特質は、「彼れはその小説の内には対話も、感想も、詩も、かきこまう」（一）とい

う構想のもとで、友人や妻と共にする執筆の闘いの日々を描き、そして、著名度の上昇とともに増えてきた読者との対話や手紙によって、その主題の提示に至った、この小説「彼が三十の時」にも、そうした特徴を持った小説ならではの現実性を得た上で、当てはまるものと思われる。

そしてさらに、「〈神〉への長い道・運命の観照」という特色を持つ<sup>8</sup>、武者小路の中期〈待つ〉時代の初期に位置するこの作品の、〈死の超越〉という主題は、その形を変えながら、後の戯曲「その妹」<sup>9</sup>（大4・3）、戯曲「ある青年の夢」（大5・3〜11）、小説「不幸な男」（大6・5）などに引き継がれてゆくのである。

#### 注

- \*1 「或る男」（百七十三）の引用は、『武者小路実篤全集』5（昭63・8、小学館）、245頁下〜246頁上に拠る。
- \*2 小説「彼が三十の時」の引用は『武者小路実篤全集』2（昭63・2、小学館）所載の本文により、これをテキストとして用いた。本文の引用については、以下同じ。

\*3 「彼」の言葉どおり、作品の題名には、作者武者小路によって、「（この一篇を我が妻に）」という献辞が添

えられた。しかしその一方では、後年、「別れた妻の事が多く出てゐる。是等を書いた事が間接に二人が別れる遠因になつてゐたかも知れぬ。」とも回想されている（「あとがき」、『武者小路実篤全集』2、昭29・11、新潮社、425頁）。

\*4 この人物については、\*3の新潮社版全集「あとがき」で、「小説に都合のいゝ人物を一人終りの方に出した」と記されている。

\*5 この加筆については、関口弥重吉の「解題」（\*2と同書、677頁上）参照。

\*6 この作品のモデルは、Kが岸田劉生、Oが長与善郎、Tが千家元麿で、OとTは実際のイニシアルを一字後へずらしたものである。また、他のイニシアルについては、\*3の新潮社版全集では、H:を白鳥、O:を鷗外と実名にしてあり、さらに、テキストで伏字とされた部分は、同じ新潮社版全集では、「性慾」「御大葬」と起こされている。以上の詳細は\*4の関口文を参照。

\*7 詳細は、寺澤著『武者小路実篤の研究——美と宗教の様式——』（平22・6、翰林書房）、141頁参照。

\*8 詳細は、\*7の寺澤著、38頁参照。

\*9 小説「彼が三十の時」の構想には、戯曲「その妹」

に用いられることになった、戦争で目が見えなくなった画家の設定もあつたという。詳細は「六号雑記」（『白樺』大4・3、『武者小路実篤全集』3、昭63・4、小学館、685頁上）参照。

また、（二十八）の手紙を書いた読者は、「その妹」の主人公のモデルとなつたという。これについては、「或る男」（百七十五）〜（百七十六）（\*1と同書）参照。

（本学教授）